
楽園の薔薇

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の薔薇

【Nコード】

N4969Z

【作者名】

柚葉

【あらすじ】

どこかの扉で繋がっている楽園。

その世界には闇を照らすために『薔薇』と呼ばれる人がいる。

でも、今回の『薔薇』はやる気なし!?

2人の護衛を連れて、いやでも仕事に行く。

そんな『薔薇』でも大丈夫…?

楽園の闇を照らす『薔薇』たちの、神秘的(?)な物語。

*これは別サイトで私が「ふーちゃん」として書いている小説です。
盗作なんてことはないです。

プロローグ

楽園の薔薇

<プロローグ>

ある日。

僕は不思議な人を見た。

水色の目。

それに明るい茶色の髪。

その女の人は、野原で何かを唱え、扉を作った。
そして、その扉の中に入っていく。

扉の中はまぶしい光であふれていた。

そんなことが何日も続き、がまんしていた僕も思いきって話しかけた。

「その扉は何？」

と。

そうすると、その人は僕をびつくりした目で見つめた。

「あなた…、これが見えるのね！」

と喜びながら言う。

「あなたも、来る？ 楽園に。」

そう言って、僕の手を取ると、扉の中へ入った。

目を開けると、そこは自然が広がるきれいな場所。

「来てくれてありがとう。あなたには、この子を頼みたいの。」

「この子…？」

考えて、気付いた。

この子というのは、女の人のお腹にいる赤ちゃんのことだ。

「そこで、あなたに、今日生まれてもらうわ。」

その最後を聞くか聞かないかの時、僕の意識はとぎれた。

* * * *

「ソフィア」

その声に気付き、私は振り返る。

「ユニゾン」

「もう、終わったか？」

「ええ。今生まれたはずよ。」

その通り、建物にはどよめきがあった。

「あの子には、イスフィールの許婚になつてもらつた。」

まだ生まれていないイスフィールをなでながら、私は目を閉じた。

「だからね、ユニゾン。あなたと、さっきの子…そうね、セイレーンにしましょう。その2人が中心になつてイスフィールを守つてやつて。この子は、この楽園にあるたつた1つの薔薇なんだから。」

私の言葉に、ユニゾンは静かにうなずいた。

「たぶんイスフィールは元気な子になるだろうから、そのうち、もう1人あげる。…任せたわよ、セイレーン、ユニゾン。…イスフィール、あなたは、この世界の闇を出来るだけでいいから照らして。」
そして誰にもなくつぶやく。
「よろしくね」と。

1・二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1・二分咲きの薔薇

< 1 >

「……。朝……？」

少女は寝台の上で首を傾げた。

「今日の天気は……。」

少し右にずれ、天井に着いている窓を見上げる。

ややあつて、嫌そうにつぶやいた。

「……晴れえ……？」

実は晴れの日が大のきらい。

「雨でも降ってくれりゃいいものの……。明日は逆さのてるてる坊主でもやろうかな。」

そういいながら、机の上のペンダントを手に取った。

これは、ルビーの粉で作られた、真っ赤な薔薇の形をしている。

この楽園にたった1つのものだ。

その時、ドタドタツと、外でものすごい音がした。

少女は慣れているようにため息をつく。

そして、首にかけたペンダントを握りしめた。

これは、『薔薇』と呼ばれる者たちの特別な能力だ。

握りしめると同時に、少女の身体から、淡いピンク色のオーラが立ち上った。

しかし、少女は何かを思いついたようにペンダントから手を離す。

「やっぱ、無視した方が良いのか？」

と、つぶやいた。

その時、部屋についている最高級の扉がものすごい音を立てて開かれた。

「僕の薔薇姫！元気だったかい！？」

薔薇姫と呼ばれた少女は、額に青筋を浮かばせる。

扉を開けたのは、そこにいた少年だろう。

「セイレーン…。元気だった？ですってえ？昨日も来ていたじゃないの！」

少女は無視すると決め込んだはずなのに、耐えきれず文句を言う。

少年——セイレーンは、満面の笑みを浮かべた。

「やだなあ、薔薇姫。一日で熱が出るかもしれないんだよ？」

「うるさい。私は年中ずーっと元気です！」

少女の頭の中で、何かが切れる、ぶちっという音。

「だからあんたは…薔薇姫って呼ぶなって言ってるでしょ…！」

少女——イスフィールは大声で叫んだ。

* * * * *

エプスタイン家。

それは、この楽園にある珍しい一族だ。

その家で生まれる姫は、たった1つの薔薇のペンダントを身につけることが出来る。

身につけた者は『薔薇』と呼ばれ、楽園の闇——悪いことを封じなければならぬ。

そして、今回の『薔薇』は。

「あーもうっ！帰ってよ、うっとうしいっ！」

エプスタイン・イスフィール。

「やだっ僕も言ったでしょ。」

イスフィールは、文句を言いつつ廊下を歩いていた。遠い親戚で、許婚——婚約者のセイレーンと一緒に。

「なんで父様の所に行くのに、あんたもついてくんのよ。」

イスフィールの周りに、どよんとした空気。

「いいんだってば。ユニゾンさんは僕のこと、いてもいいみたいだし。」

話しているうちにユニゾン（父）の部屋についた。

イスフィールは、セイレーンの言葉を無視して扉を開ける。

「父様！入ったから！」

普通は『入るよ』ぐらいなのだ。

けれど、イスフィールは『入ったから』。

「お、来たかイスフィール。セイレーン君も入っていいぞ。」

セイレーンはその言葉を聞き、ほらねと言うように目を細めた。

さっきのイライラが残っているせいか、イスフィールは見ないふりをして席に着いた。

セイレーンも同じように席に着く。——もちろん、イスフィールの隣。

その光景を目にしたユニゾンは、こらえきれずに吹き出した。
そのまま大笑いをする。

そんなユニゾンを、イスフィールはものすごい顔でにらんだ。

「ユニゾン、いいから話を続ける。と言うか、話し始める。」

全然気付いていなかったが、ユニゾンの後ろに人がいた。

1・二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1・二分咲きの薔薇

< 2 >

「え、セイレーン…？」

その少年は、とてもセイレーンに似ていた。

イスフィールは自分の隣を見てみたが、そこにはちゃんとセイレーンがいた。

驚いた顔で。

天の助けとばかりに、ユニゾンは話を始めた。

「ああ、彼はレイアースと言ってね。セイレーン君と同じく、未来のここ——地球から来たんだ。ここの執事になってもら——」

「なんですってえ！！」

ユニゾンが最後まで言い終わる前に、イスフィールが立ち上がった。

「あのねえ、父様。私、執事とかいらなんだけど。」

「違うんだ、イスフィール。彼は、君の母さん——ソフィアが呼んだ人なんだよ。」

「…母様が？」

意外なユニゾンの言葉に、イスフィールは驚く。

「君は薔薇だろう？だから、その護衛もかねている。」

「それならセイレーンがいるじゃない。」

「…セイレーン君は確かにいい護衛なんだが、イスフィールが、その、元気すぎるんだ。」

「…あ、そ。」

「で、どうして、その、レイアース、だっけ？」

セイレーンはレイアース自身に確認した。

レイアースは小さく頷く。

「どうしてお前に似ているか、だろう？」

レイアースが自分でセイレーンの質問を口にした。

イスフィールは、そんな2人を見比べることしかできない。

「ああ、それはね。」

ユニゾンが口を開く。

「2人は双子だったんだよ。」

「『ええ——！！』」

レイアースも含めて、3人で驚きの声を口にする。

「確かにそっくりだけど、双子って……。」

「ユニゾン。どっちが上だ？」

レイアースが聞く。

「上？」

「どっちが兄かってこと。」

セイレーンも同じようで、ユニゾンが分からなくなったところを説明した。

「そういうことか。それは……確かセイレーン君じゃないか？」

その言葉を聞くと、レイアースは嫌そうな瞳をセイレーンに向ける。

「何だよ、その目は！」

セイレーンは、レイアースが向けた瞳に、少し引き気味になりながら、反抗する。

「いや。」

レイアースは首を振る。

ふと、イスフィールが拳手した。

「あ、私も分かる、その気持ち。これが兄だったら、すごく嫌。」
イスフィールに『これ』扱いされたセイレーンは、頭が真っ白になる。

そんなことも全然分からないレイアースは、頷きながらイスフィー

ルの頭をくしゃくしゃとなでた。

（お、大きい…。）

レイアースを見上げて、思わず感じてしまう。

2人の身長差、約10cm。

「まあ、そういうわけだから。レイアース君、君はイスフィールのそばについていてくれないか？ 薔薇は命を狙われることも少なくない。」

真剣になったユニゾンの言葉に、イスフィールは反抗するのをあきらめた。

1・二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1・二分咲きの薔薇

< 3 >

「で？フルネームでなんていうの？」

部屋につくと、イスフィールはレイアースを振り返り、そう聞く。
深い緑色の瞳。

紙はその瞳に似合わない黒だった。

そんな彼を見ていると、深い色に引き込まれるような錯覚を覚える。
レイアースは、少し驚いたような顔をした後、目を閉じて吐息のようにつぶやいた。

「メイデン・レイアース」

「地球での名前は？」

またイスフィールが問うと、レイアースは少し考えるような顔になった。

「…覚えていない。というより思い出せない。」

そして、ふとレイアースが床に目を向ける。

「？」

「お前…薔薇のペンダント、つけてないのか？」

「へ？…あっ！あの時セイレーンに投げつけた後、すっかり忘れてたっ！！」

しゃがんで探し始めたイスフィールを見て、レイアースは思わず笑ってしまった。

「お前さあ…。普通投げたりしねえだろ。そんな大切って言われてるものを。しかも、護衛に向かって。」

イスフィールは、しゃがんだままレイアースを見た。
そして、また下を見る。

「大切ななんて思っていないもの…」

イスフィールがつぶやいた言葉は、意外な言葉だった。
エプスタイン家の人々は、薔薇のペンダントは神聖な物だと教えられてきたはず。

もちろん、イスフィールもそう教えられてきた。

それなのに、イスフィールは大切ななんて思うことなど、あるわけがない。

「なぜ？」

レイアースが問う。

イスフィールはやっと見つけたペンダントを握りしめて語った。

「だって、私はこれのせいで、ここに閉じこめられた。」

その言葉を聞き、レイアースの目が驚きで薄い緑色に変わった。

「私は薔薇だったから。…さっき父様が言ったとおり、薔薇は命を狙われるの。闇の人の手によってね。そのせいで、何もない真っ暗な部屋で、私は過ごすことになった。」

「でも、それって薔薇のせいじゃないんじゃない？」

「薔薇のせいよ！だって、闇の人がいたって、薔薇じゃなかったら、そんな風に過ごさなくてもよかったの！全部、薔薇のせいだもん…。」

「子供のようにイスフィールは繰り返した。

するとレイアースが、しゃがみこんでくしゃくしゃとなでた。

さっきとは少し違うような感情がこもっている。

「お前、やっぱり薔薇にそっくりだ…。」

レイアースの目は少しうるんでいて、明るい緑色になっていた。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

楽園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

< 1 >

次の日。

イスフィールは、部屋に誰かが入ってくる気配を感じ、むくりと身を起こした。

「あ、起きた？」

一日でなじんだらしいレイアース。

彼がさっきの気配の犯人だ。

「…今日の天気…」

「あゝ？俺のこの姿見たら分かるだろ？雨だよ、雨！！」
確かにレイアースの服はところどころ濡れている。

イスフィールは安心して息をついた。

「どうした？雨の天気が好きなのか？」

レイアースが不思議に思っただけ。

「うーんとねー。雨が好きて言うより、晴れが嫌い。」

「へー。変わってんなあ。」

理由はある人のせい。

「仕方ない」としか言いようがなかった。
と、その時。

昨日と同じようにガタガツと外で音がした。

「ひっ…」

「ひ？」

レイアースが不思議そうに首を傾げる。

「レイアース！！今日、本当に雨だよね！うそじゃないでしょ！？」
「降ってたよ、すぐく。ほら、今だって雨音するし。」

イスフィールの焦りに、レイアースも思わずつられた。
ちなみに、どうしてあせっているかは不明。

そしてまた、昨日と同じように扉が壊れそうになりながら開かれた。

「薔薇姫」遊びに来たよ。」

「セ、セイレーン！！何で来てんの！？」

驚きのあまり、部屋の隅っこに逃げる。

「なんでもなにも無いでしょー。だってここ、僕の家だし。」

当然のように言うセイレーン。

イスフィールが聞いているのは、実はそのことではなかった。

「じゃなくて！あんた、雨の天气が嫌いだって言ってたじゃない！」

「そーだっけ？」

「とぼけないで！服が濡れるから嫌いって！なのになんでいんの？」

「月日がたつと、嫌いな物も変わるってことだよ、薔薇姫」

「なにそれ！あ、じゃあ好きな人も私じゃないのね！」

「いや、それはない。」

「えー！！！」

意味の分からない会話が、レイアースに押し寄せる。

「ちょ、ちよつと待て！セイレーンが来てるのも分からないが…」

「…レイアース君。今、僕のことを呼び捨てに…！」

「はあ？どうせ双子だし。」

「双子でも兄は兄なんだよ。」

「信じてねえし。」

一刀両断。

「それにレイアースの方が大人っぽいし。」

イスフィールが続けた。

「イスフィール」。僕のフォローしてくれないんだ…」

わざわざ泣きまねを始めた。

「するわけないじゃない。晴れの日はかりやって来たりして、うつ

とうしいの!」

「なるほど。」

レイアースが小さくつぶやいた。

(そうかこれが「嫌いな理由」)

レイアースに心の中で『これ』扱いされたセイレーンは、気を取り直して、と立ち上がる。

なんとセイレーンには理由があつたらしい。

「は? 気を取り直して帰んの? じゃーね。」

イスフィールがなんか冷たい気がする。

「ちがーう! 君に仕事。」

「はあ?」

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

楽園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

< 2 >

「薔薇として、解決してもらいたいことがあるんだ。」

今までとはうってかわって、真剣なセイレーン。

イスフィールが不思議そうに首を傾げた。

「闇の人物か？」

レイアースも、緑色の瞳が驚きで薄くなる。

「そこはまだ。でも、暗殺されたのは確かだと。」

「暗殺！？」

イスフィールの反応が少し変わった。

「おっと、ついうっかり。」

「ふざけるなっ！…で、どこの奴だ？」

「街の方にあるラクリン家。その当主とスズミって人。」

セイレーンは淡々と説明する。

「そうか…。あそこは気性が荒い家だからな…。ケンカとか、そーいうので殺害つてのもありうる。」

レイアースも1人で考えている。

しかし、イスフィールの頭の中は真っ白だ。

（殺害って…。大変じゃない！）

「というわけで、イスフィール。詳しいことを調べてから向かう。その間待機している。」

レイアースはそれだけ言うと、セイレーンとともにどこかへ行ってしまった。

「え…、ちよつと私は？」

イスフィールの声は、レイアースが閉じた扉に跳ね返り、部屋に響いた。

（あいつのことだから…。たぶん何かするだろうな。）

長い廊下を走りつつ、レイアースは苦笑した。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

楽園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

< 3 >

「ったくもう…。勝手に調査に行ったりして、何の為の護衛なの！
！ずいぶんいい加減だわ。」

イスフィールは一人でぶつぶつ言いながら、ラクリーン家のことを
思い出していた。

（えっと…確か、街はずれにある小さな家。で、当主とスズミさん
…って、ラクリーン当主の奥さん。1人子供がいて、その人が私と
同年…だっけ？名前が…）

その時、開きっぱなしの引き出しの中から、ひらりと紙が出てきた。
「？なにこれ？」

封筒らしき物。

中の手紙には『イスフィールへ』と書いてあった。

『イスフィールへ』

君がエプスタインの子だと分かって、そっちに行ってからもう
どれくらいたつのだろう。

僕はラクリーン家の人に拾われて、楽しく過ごしている。

名前も変わって、ラクリーン・トライドになったんだ。

本当の用件はそういうことじゃなくて。

この頃、ある執事の様子がおかしい。

その執事の噂が『夜になると、暗殺活動をおこすらしい』とい

うものなんだ。

薔薇となった君に、その人のことを解決して欲しい。
様子が闇に飲まれた感じと同じなんだ。

遊びに来るついで、とでも思っただけ来てくれないか。

ラクリーン・トライドより

手紙はラクリーンの人からだ。

イスフィールあてということは、さっきの当主とスズミさんの子供
だと考えられる。

「ラクリーン・トライド…？って誰？」

答えてくれる人はいない。

「でもこれって、さっきの事件に関係してるんじゃない？」

そう考えて、一から読み直す。

「うん。きっとそうだ。」

そうして、護衛の2人がいないかを見回した。
なぜかって？

「私、いいこと思いついちゃった！」

——イスフィールは、こうして1人で行くことを決めたのだった。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？（後書き）

なんというか、お茶目？な感じですよ。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

楽園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

< 4 >

その頃、セイレーン達かというと。

「…なあ、嫌な予感しない？」

レイアースがセイレーンに聞く。

何のことは不明だけど。

「なにそれ？」

「いや、あのイスフィールだぞ。絶対何かある！」

決め込むレイアースに、セイレーンはため息をつく。

「そんなの、ふつつじゃないか。」

と。

* * *

「んーっと…。服はセイレーンを使うとして、髪はどうしょ？」

イスフィールは、レイアース達がそんな話をしていることも全然知らず、準備にとまどっていた。

その作戦とは。

『男に変装して、ラクリーン家に忍び込み、調査しよう！作戦』
名前が長い作戦である。

「髪…結えば大丈夫？かな？」

とつぶやき、後ろで軽く結んだ。そしてセイレーンの服に着替える。
「ま、一応大丈夫だね。」

鏡でもう一度確認すると、イスフィールは窓から外に出る。外はもう晴れていて、抜け出すにはぴったり。

（ごめんね、レイアース、セイレーン）

心の中で謝ると、イスフィールは町に向かって走り出した。

「イスフィール！現地調査に……って、あれ？」

今度はレイアースが扉を開ける。

壊れそうな音はもちろんした。

しかし、その部屋にイスフィールはもういなかった。

その光景を見て、レイアースは固まる。

「どうした？急に止まったりして。」

ちよつと遅れてきたセイレーン。

「うそだろ……。」

ま、自業自得だな。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

楽園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

< 5 >

「……ここってどこ？」

イスフィールは完全に迷子になっていた。

（だって！小さい頃から外に出ていないんだもん。仕方ないよ、これ！あゝ私ってすごいバカ……）

心の中でぶちぶち言いながら歩いていく。

ため息だって、10回はもうとっくに超しているだろう。

「引き返そうかな……」

そうつぶやいて回れ右。しかし、もうどこを通ってきたかも不明である。

（どうしよう！？）

また回れ右するとどうなるでしょう。

（ま、カンでいこう……）

正解は、最初の向きに戻る。↑分らない方、やってみて。

どんどん進むと途中で誰かに呼び止められた。

「お前、イスフィールって奴、知ってるか？」

「れ」

レイアースと言いそうになったが「れ」でとどめる。

ということは、自分が出てからすぐに戻ってきたようだ。

「だ、だれだよ、それ！イスフィールなんて知るか！それに、わ、じゃなくて俺の名前はイスライール！人違いなんてすんなよ！めーわくだからなっ！！」

最後の「めーわく」と言うところだけ力を込めた。

これはイスフィールとしての気持ち。
もしバレたら、すごいことになる。

『エプスタイン家の薔薇姫が家出!』

などということになりかねない。
というより。

（私って、男のフリ上手なのかな。 ちょっと悲しい。）
だって。

「そうか…。」

とかなんとか言いながら、レイアースもどこか行っちゃったし。

（こりゃ、本物だと勘違いしてないか…？）

逆にガツカリってかんじ。

（おっと、どんどんマイナーになってしまっ。 そうそう、目的はラ
クリーン家の調査！）

イスフィールは心の中で自分を応援した。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

楽園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

<1>

「で。」

レイアースを振り切ったのはまだいいことだったが、迷子だと言うことは変わらない。

「これは人に聞いて教えてもらうしかないのかなあ。」

イスフィールがげんなりしていると、また（？）肩をたたかれた。今度はどちら様と思い振り向くと。

（だれ？）

知らない人だった。

「君：イスフィールにそっくり。」

その人もイスフィールのことを知っている。

（おかしいな？薔薇姫のことは公開されてないはずなのに…どうしてこんな人が？）

と、内心首を傾げていると、その人はいつこりと笑った。

なぜかその笑顔に懐かしさを感じた。

「ねえ。君の名前は？」

人懐っこい笑み。

少しセイレーンと印象がカブってはいるが、その笑みの裏には悲しみがほんの少し読み取れた。

「わ…じゃなくってー。俺の名前はイズライル。イールって呼んでもいい。」

また私と言いそうになるが、ごまかした。

「そうか。僕はトライド。ごめんな、イール。人ちがいだった。本
当にごめん。」

本気で頭を下げるから、イスフィールも少し慌てた。

ここは技が必要となる場。

「そこまでするなよ。それに、話しかけたのが俺でよかったじゃん。

」

『トライド』という重要なキーワード。

トライドは「へ？」と顔を上げる。それに向かって、イスフィール
は、にっと笑った。

「俺の主人―イスフィールから伝言を預かっている。」

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

楽園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

< 2 >

「あゝくそっ！イスフィールの奴め、どこいったんだ？」

一方、イスフィールに見事にだまされたレイアース。

「レイアース！見つかったか？」

もう町の半分を探したセイレーンが駆けてくる。

両手で×の形を作って見せた。

「そうか…。ま、あいつは昔から行動力だけは人一倍あったもんなあ。どっかに調査しに行ったんだろ。」

能天気にも口笛を吹いている。

(…あいつがセイレーンを嫌いになる気持ちがあった気がする…)
なんといても、一緒にいるだけで疲れが100倍！またはそれ以上たまりますって感じなのだ。

セイレーンは顔つきをサイコロでも転がすように変えて言った。

「まあ、イスフィールもイスフィールなりにがんばっているんだ。僕らも負けないように調査に行こう。」

何の勝負だどっつこみたくなったが、こういうところだけはカッコイイなと思い、双子の兄の背中を追いかけた。

* * *

伝言というのはもちろんうそ。

「本当！？イール、僕の家に来てよ！それで、その話を教えて。」

しかし、トライドは、もうすっかり信じてしまっていた。
そして、半分引きずる感じで、イスフィールを自分の屋敷に連れて
行った。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

楽園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

< 3 >

「で？伝言つて何？イスフィールはなんて？」

椅子に座ったとたん、トライドはイスフィールを質問攻めにする。
少しだけイスフィールはたじろいだ。

（何も考えてないじゃーん！！）

ただ、トライドの家に入り込む為についた嘘。

だから、「なに？」と聞かれても、どうしたらいいのかわからない。

（ああ……。ここに長く居られるための理由……）

「あ、もしかして、あの手紙のことかな？闇の人かもしれないって
いう——」

何を勘違いしたのか、トライドがそんなことをつぶやいた。

（それだ！）

心の中でひらめく。

顔に出さずにと注意しながら、出まかせの『理由』をイスフィール
はしゃべり始めた。

「そう、そのことで、なんだけど。『まだ闇の人物と確定したわけ
じゃないけど、一応イスフィールを送っておく。だから、執事とし
て使っていていいから、その子に調査させてほしい。』だそうだ。」
ちよつと早口で言い切る。

トライドはふーんとだけ言った。

（……これはいいってことなのかな？他に何か言うことはないのか！）
少しイライラ。

ややあつて、トライドは口を開いた。

「分かった。いいよ、イール。分かるまでラクリン家で調査して。僕も多分狙われてるし。イスフィールの執事がいるなら心強いし！」
「ちょちょちょ、ちょっとストップ！」

トライドの言葉にイスフィールはストップをかける。

「今、僕も狙われているって言ったよな！？どういう意味だ！？」
身を乗り出して聞いたイスフィールに、トライドは少しとまどう。
「え、いや、だって、僕のお父さんとお母さん、それで死んじゃったし。」

（つながった！）

「え、まあとにかく。よろしく、イール。」

あの人懐っこい笑みに、頭が少し痛む。

（どうして……？会ったのは初めてのはずなのに。）

「あ、ああ。任せろ！」

とかなんとか、てきとーに言う。

調査をするためには、かなりの時間が必要だ。
そしてふと考える。

「悲しくないの？」

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

楽園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

< 4 >

「悲しくないの？」

（やべっ！女つぼくなってしまった〜！）

トライドは少し驚いた顔をした後、「ううん。」と小さく首を振る。ちよつとの笑みを浮かべて。

「なぜかね、泣けないんだ。僕は下町で育ってね。―あれ、イスフィールは教えてないの？」

「あ、うん。昔のことは話さないんだ。」
もう口から出まかせ。

トライドのしゃべる意味も分からない。

「そつか。下町でイスフィールと会ったんだけど。話に戻るよ。僕はその頃泣き虫でね。今になったら、涙が出なくなっちゃったんだ。」

（下町で？私は外出したこともないのに、どうして？）

そういえば、あの手紙もおかしい。

トライドとの関係は不思議なことがたくさんあった。

（まず、あの手紙の『君がエプスタインの子だと分かって』の文。私は最初イスフィールだということを隠してどこかにいたってことよね。それでトライドと私が下町で育った…。でも、その記憶がない。それじゃあ―）

「イスフィール？」

「は？え、ああ。」

考え込んでいたところを、トライドの声が現実に戻した。

「分かった。俺は、しばらくここにいますから。」

そうして締めくくると、トライドが案内してくれた部屋に入る。

（私の中には、私の知ってるはずの記憶がない。）

外は、もう暗くなっていた。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

楽園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

< 5 >

「ふあゝゝ。」

真夜中の商店街。

もう店は閉まっている。

そんな大通りを、イスフィールは男子の格好をして歩いていた。

「今日も出るのかなあ、闇の人物。」

イスフィールは町の人、トライド、ラクリーン家で働いている人に話を聞き、闇の人物を探していた。

イスフィールだって調査するつもりだ。

と、その時。

曲がり角の向こうから高い悲鳴が上がる。

女性だと仮定し、イスフィールは走って向かう。

（闇の人かもしれない。）

「誰だ！！」

（あ、男子で慣れてしまった。）

少しがっかりしたが、今はそれどころではない。

「あら、あなたも見てしまったのねえ。なら、次のターゲットはあなたにしようかなあ。」

そこにいたのは、茶色のローブをまとった女の人っぽい。

「もしかして…闇の人！？」

「さてね。それを決めるのは薔薇の仕事だし。じゃ、またねえゝ」
そう言うと、その人は茶色のローブをひるがえらせて、イスフィー

ルと反対方向に走っていく。

イスフィールはしばし固まっていた。

（薔薇の仕事、かあ…。）

自分が薔薇なのに、ここにいることが情けないと感じた。
抜け出して、外に出て、浮かれて…。

（私、なにやってるんだろう…）
でも。

戻る気はしなかった。

ここにいるのに、何もしないで帰る方が情けないからだ。
もうすぐ太陽が昇る。

その太陽を見つめながら、偽りの人間『イスライル』として調査
することを、再び決意した。

4・レイアースの「瞳」？

楽園の薔薇

4・レイアースの「瞳」

< 1 >

そのころのレイアース達かというと。

「こつちじゃなかったか？」

と、さっきの叫び声を頼りに闇の人物（かもしれない）を探していた。

「確かに現場はここだ。…でも、逃げたな、この様子だと。」

イスフィールの代わりに調査を長年やってきたセイレーンは、区別するのにも慣れていようだ。

「あー、ここにイスフィールがいるという考えはだめだったか。」

レイアースが今日何度目か分からないため息をつく。

イスフィールが『薔薇』としているかもしれないという、小さな希望を頼りに来たというのに。

と、その時。

レイアースの目に痛みが走る。

思わず押さえるが、さらに痛みが強くなるばかりだ。

「なんだよっ、これ…！」

そう呟くレイアースの様子に気付いたのか、セイレーンが振り向く。

「レイアース？どうしたんだよ。」

「急に…目が…。」

セイレーンの黒い目が大きく見開かれた。

「…この手のものなら、ユニゾンさんが知ってるはずだ。」

そう言うと、痛みにしやがみこんでしまったレイアースの手を引く。
レイアースの意識は遠くなっていた。

* * *

次に目を開けたところは、エプスタイン家にある自分の部屋だった。
「俺は…。」

今はもう朝になっている。

出かけたのは確か夜で、目が痛くなって。

あれ、何しに出かけたんだっけ？

そこまで考えて、ばやけていた意識がはつきりとする。

「そうだ、イスフィール！」

やつと思い出した。

そしてくらくらする頭を押さえながら、ユニゾンの私室に入った。

「お、レイアース君。もう目は平気か？」

「はい。おかげさまで…。」

ユニゾンの能天気な声がレイアースを迎える。

倒れない程度に、レイアースはその場で脱力した。

どうして大事な娘がいなくていうのに平和なんだろうか。

「ところでレイアース君。今まで見えなかったものが、見えてはいないか？」

ユニゾンもこの間のセイレーンのように表情をころっと変える人だ。

レイアースは頭を押さえていた手を離し、辺りを見渡してみた。

「…特に、何も見えませんけど。」

素っ気なくレイアースが答えると、ユニゾンはふむ、と考え込んだ。

「レイアースの瞳が発動されないとしたら…」

とか、わけの分からない言葉を呟いている。

ふと、その隣ですねたようにハーブティーを飲んでいたセイレーンの小指に目が止まった。

「緑の糸…？」

そう呟くと同時にはつきりとそれが見えてくる。

「どうした？ 僕の小指が何かしたか？」

同じ小指をセイレーンが見ても、何も無いようだ。

しかし、レイアースには確かに見えている。

誰かに繋がっている、数本の緑の糸が。

そして、その1本は――

「俺の小指……。」

4・レイアースの「瞳」？

楽園の薔薇

4・レイアースの「瞳」

< 2 >

これはその昔。

ユニゾンが薔薇の護衛をやっていた頃の話だ。

「ユニゾン！来て。おもしろいわよ、これ！」

図書室の奥から、当時の薔薇であるソフィアの声。

「図書室で騒ぐの禁止」。で、どした？」

呆れ顔でユニゾンが向かう。

いつもこんな感じでうるさくなる。

どんなに注意しても、ソフィアは騒いでしまうのだ。

「今度はどんな本？」

と顔を上げると、ソフィアが本のページを見せる。

その本は『糸』という題名でP76である。

とまあ、そんなことは追いとして…。

「緑の糸？」

「そうよ！人の小指についていて、別名信頼の糸というらしいわ。」

そのページをざっと見てみると、深緑の目を持つ者にだけ見えるらしい。

しかし残念ながらソフィアの目も、ユニゾンの目も色は違う。

「…私の目か、ユニゾンの目が深緑だったらいいのに。」

ふてくされたようなソフィアに、ユニゾンは苦笑した。

* * *

記憶をたぐり寄せてみたユニゾンは、驚きで思わず立ち上がる。

「まさかソフィアは…！」

そのことを覚えていて、レイアースを楽園に送ったのだ。

しっかりと糸が見え、呆然としているレイアースの瞳をしっかりと見てみると、ちゃんとした深緑。

たまに誕生で瞳の色が左右されるが、もとは澄んだ深緑だ。

もしその本の通りで信頼の糸だというのなら、レイアースの小指には――

「レイアース君。今、君の小指にその糸は何本ある？」

まだ楽園に来たばかりだから、その数は少ないはずだ。

「3本だ…。ユニゾンと、セイレーンと、あと、もう1人。」

誰と繋がっているか、までレイアースはユニゾンに教えた。

おそらく、もう1人はイスフィールだろう。

「じゃあ、この糸をたどっていけば…。」

「そうだ。その糸は信頼の糸。見えるのは君だけだ。その目は大切にしなさい。」

「信頼の糸…。」

レイアースはもう一度自分の小指についている糸を見つめた。

あの呆然とした顔ではなく、しっかりと決意を固めたという顔。

「そうそう、セイレーン君もレイアース君も、ちよっと私の話を聞いていってくれないかな？」

言われた2人はとまどったように顔を見合わせ、頷いた。

そしてユニゾンは話し始める。

イスフィールの過去について。

5・イスライル、バレた!??

楽園の薔薇

5・イスライル、バレた!?

<1>

「あー…3日前から何の進歩もしてない……」
イスライルことイスフィールはラクリーン家の部屋で頭を抱えていた。

(調査しなきゃいけないのに。)

早くしないとセイレーン達に見つかってしまう。

「でも、なあ……。」

ため息がさつきから止まらない。

「イール?何かあった?」

ここの住人トライドが部屋に入ってきた。

これといってやばいことはないが、なぜかイスフィールは慌てた。

「いやいやいや、何でもないから!」

「…そう?」

妙にきつぱりと言い切ったイスフィールに、トライドは不思議そうな顔をして部屋を出て行った。

今度はホッとしたようなため息がもれる。

「……」

(あのまま、抜け出したりしない方が良かったかなあ…。いやいや、のこのこ帰っていったら怒られて、一生笑われるだけだし!)
気持ちを切り替え、イスフィールは立ち上がった。

「さあて!調査に行くぞお!」

立ち上がった拍子に、机に足をぶつけた。

* * *

だいぶ（本っ当にほんの少しだけど）道を覚えたイスフィールは、情報をたくさんくれる店を知った。

普通の果物屋だが、そこにいるおばちゃんが新情報を提供してくれるのである。

ウラ道での名前は情報屋。

今日もそこに向かおうとしていた時。

途中で誰かに呼び止められた。

早く行きたいのに、と内心ぼやきつつ振り向く。
そこにいたのは。

「お前、イスフィールって奴、知ってるか？」
「れ」

レイアースと言いそうになったが、「れ」でとどめる。

——って、デジャブ？

前って言うか抜け出した時とまったく同じ光景だ。

あ、でも1つだけ違う。

（何で笑ってんだ？）

レイアースがニヤニヤ笑っていた。

正直言っただけ怖い。

（もしやのまさか…バレたとかいう？）

冷や汗たらーり。

しかしちよっと言ってみよう。

「イスフィールって誰だよ？」

「ほお。記憶喪失？」

「……。」

完全にバレていた。

「よし。」

回れ右をして駆け出す。

が、後ろにも知ってる人が。

「うつそお…。」

そこにいたのはセイレーン。

「ははは…」と乾いた笑いだけ、イスフィールの口から漏れた。

5・イスライル、バレた!??

楽園の薔薇

5・イスライル、バレた!?

< 2 >

「んで?」

「もう全部言いましたってばあ…。」

「すげー笑ってる(その笑いが逆に怖い)レイアースに問いつめられ、イスフィールは今までのことを話した。」

「何でそんなことしたんだよ!」

「だって、」

「だってじゃない!」

怒鳴られて顔を上げると、そこにはレイアースの怒った顔とセイレーンの苦笑い。

「薔薇は闇の人に狙われてんだぞ! 抜け出した時に偶然会って殺されたりしてたらどうするつもりだった!？」

イスフィールは、確かにそんなことは考えていない。

「まあまあ。イスフィールにも理由があったんだろう?」

セイレーンがレイアースをなだめ、優しく聞いた。

「私は大人しくしてるのが性に合わない。それだけよ。」

「死んでたらどうするつもりだ?」

「私の親戚にも似た力を持つ人がいるわ。薔薇はその人ができるじゃない。」

「バカ言っでんじゃねえ!」

ついに、レイアースが立ち上がった。

座っていたイスが後ろに倒れる。

「薔薇としてはそれでもいいかもしれないし、そうするしかないだろうな。けど！いなくなるのは『薔薇』じゃねえ。『イスフィール』っていう『人』なんだよ！」

イスフィールは驚きで目を見張る。

「でも、さ。薔薇が人のために何かやつちやいけないの？」

「そういう意味じゃねーよ。『イスフィール』がいなくなったら、ユニゾンさんやセイレーン、今はいないソフィアさんはどう思う？ 悲しむんだ。そういうことを起こさないために、どうすればいいか。答えは出てるよな？」

静かな、淡々とした口調。

その言葉達はずっとイスフィールの頭に入り、答えを知ったイスフィールは深く頷いた。

「無駄はせずに、別のやり方で、危険じゃない方法で事実を探り出し、闇の心を浄化する。」

「その通り。じゃ、行くか！」

「行くって、どこに？」

レイアースはニツと笑って言った。

「もちろん、ラクリーン家さ。」

5・イズライール、バレた!??

楽園の薔薇

5・イズライール、バレた!?

< 3 >

「ここ、なんだけど。」

イスフィールは護衛の2人を連れ、今来た道を引き返した。
ラクリーン家は町のはじつこにあるため、商店街とはちよっぴり遠い。

「えーっと、俺らと同年の奴、いるんだろ?」

「俺ら? え、もしかしてレイアースと私って同年! ?」

「もしかなくてもそーだよ。っーか知らなかったのか。」

「レイアースと僕は双子だからね、イスフィール。」

目的を見失いかけていた3人。

しかし、セイレーンのセリフでイスフィールは思い出し、訂正する。

「セイレーン! 私ーじゃーなくて——! 俺は今はイズライールなんだ! レイアースも間違えないで!」

「おお。そーいやそーだったなあ。」

「で、トライドにはイールって呼ばれてるから。あんた達もそれで呼んでいーよ。」

「あんまし変わってねーけどな。」

その小さなレイアースの呟きをイスフィールの耳は逃さない。

「うっさいわね! その方が短くて良いじゃないの!」

「短くても慣れない名前には変わりはないだろ?」

「ふっ……私は3日で慣れたわ。」

「誰にもイスフィールって呼ばれてないからだろ。」

「ぐっ……」

それを言われては何も言い返すことができない。

「ほら、2人とも！入るよ？」

セイレーンはいつもこういう役である。

「…分かったわよ。とにかく、名前に気を付けてね！」

「へーへー。」

何だ、そのテキトーな返事！と思ったが、ロゲンカは体力を使う。それにキリがいい所はない。

永遠に続くのも疲れるから、2人はこれでやめておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969z/>

楽園の薔薇

2011年12月29日22時45分発行